

丹波市

地域おこし

協力隊

地域おこし協力隊の活動を報告します

市内の住民自治の支援に取り組む

たていし みき
立石実希さん vol.54

経歴：大阪府出身。20歳。学生時代に遊んだボードゲームをきっかけにコミュニティデザイナーになる。

任期：令和5年9月～



はじめまして。9月から地域おこし協力隊として活動している立石実希と申します。全国各地で耳にするようになった協力隊という活動ですが、その任務は各地域が抱える課題によってさまざまです。私の任務である住民自治の支援とは、地域住民の思いや活動を、専門的な知識と方法など技術面でサポートすることです。その結果、地域に新たなつながりがうまれたり、もともとあるつながりが再編集されたりしていきます。それらが地域にとって良いとされ、価値が認められることで、私が仕事として取り組めることに喜びと誇りを感じています。

そうしたつながりは、その場しのぎの仕組みでは長期間にわたり在り続けられないのも事実です。適切な役割に、適切な緩やかさでヒト・モノ・コトがつながり続けられる仕組みも地域

には必要だと思います。私は地域おこし協力隊として、また、私の夢として、つながりが続いていく仕組みをデザインし、同時に地域のプレイヤーであることを楽しみたいと思っています。

まずは地域を知り、今あるつながりを学ぶことから始めたいと思います。どうぞよろしくお願いします。



子ども向けのコミュニケーション体験イベントで講師をする立石さん(写真左)

市長・林時彦の
時を駆ける

「第九」を歌いました！



日本では、年末に第九(ペー
トーヴェン作曲交響曲第九番)
を歌うことが師走の風物詩のよ
うになって久しくなりました。
「サントリーの一万人の第九」
などは、その最たるものとなっ
ています。令和三年にここ丹波
市で「第九」を歌おうという機
運が盛り上がり、合唱団員等
三十人で、第一回目が始まった
と聞いています。今年で三回目
を迎えるということで、合唱団
員の募集があり、私を含めて初
めて「第九」を歌う人が十数人
加わり、総勢約百十人となりま
した。
初めてドイツ語で歌うことや
暗譜(楽譜を覚え歌うこと)を
することなどが決まっているば
かりか、オーケストラと一緒に
舞台上立つことを聞いて、躊躇
する気持ちもありましたが、友
達に背中を押されて参加を決め
ました。

練習は五月から月に二回ほどのペースで続き、市役所への通勤車中では、毎日CDで自分が歌うテナー部を聞いて覚えまし
た。練習途中で、「ハレルヤコ
ーラス」の追加も決まり、覚え
る歌詞は増えていきました。ア
ンコール曲が、「ふるさと」と
聞いた時には、ほっとしました。
イベントやお祭りが復活したた
め、出席することが増え、練習
に参加できないこともありまし
たが、何とかついていきました。
十二月三日の本番当日は、丹
波の森公苑ホールに、約六百人
の観客を集め、オーケストラの
「アンサンブル神戸」の演奏と
共に歌うことができ、客席から
は拍手とアンコールの声をいた
だきました。アンコールの「ふ
るさと」を歌った時には、充実
感とふるさとの歌詞も相まって
少し涙ぐんでしまいました。
来年は、十二月一日に予定さ
れているそうなので、「たんば
の第九」が定着するように続け
ていきたいと思っています。

丹波市長 林 時彦